

ドキュメント：ソクラテック・ダイアローグ

2018. 03/Springe

—比較、およびSDの副産物についても—

草間さゆり（ひろしま哲学カフェ ～呼吸と哲学のカフェ）



1. ソクラテック・ダイアローグの虞に

わたしが初めてソクラテック・ダイアローグ（以下、SD）に参加したのは2017年8月、お盆のこと。『カフェフィロ』副代

表の松川絵里さんが岡山で主催した2日間のセッションだった。計6人の参加者で決めた問いである「家族とは何か？」について、かなりのプライベートな例を用いながら対話は進んだ。堀江先生

の言う「グループが、ある意味で否応なく『哲学してしまう方法』¹⁾」であるSDを通じて感じたのは、

(1) これは単なる「理性を用いた対話」ではなく、感情的な側面を大いに含む対話ではないかということ——そんなこと考えれば当たり前のことだ、と誰かに言われるかもしれないが。「感情的な側面」とは例えば、わたしはひとりの参加者に対し、メタ・ダイアログにて「相手の意見を論理的に否定するのは構わないが、そのような乱暴な言葉遣いを聴くのは心が痛むのでやめてほしい」と申し出るほど彼に対しあまりよいイメージをもっていなかった。しかし対話がだんだんと進むにつれて、そんな彼も「わたしたちの真理を出すための大切なメンバー」として感じるようになり、彼を受け入れられるようになって

¹ 中岡成文 監修、堀江剛 著『ソクラテック・ダイアログ —対話の哲学に向けて』大阪大学出版会、p.26。SDの思想的背景や歴史についても書かれている。

た——普段のわたしの場合、心を痛められた相手に対してこうした態度にはならないと思う。たったの2日間だったが、ひとつの問いに立ち向かう共同体感をぐっと感じられて、出会ったばかりの他者をロゴス的にもパトス的にも身近に感じられた。互いの考えや感情を、よくある一般的な会話よりも素直に言い合えた。この「気持ちよさ (comfortableness)」は日常のコミュニケーションではなかなか味わえない。岡山から自宅までの高速バスの中で、人生で経験したことのない種の興奮がずっと冷めなかった。わたしにとってSDは、究極の「相互理解」の方法だと感じた。

しかし、この2日のセッションは大変短いバージョンだという。本家のSDはもっと長いらしく

(SDが始められた頃である戦前は一週間かけるのが普通だったという²⁾、聞けば5日間もあるらしい。調べると、ドイツでは「政

² 前掲 p.73

治哲学アカデミー (PPA: Philosophisch-Politische Akademie)」と「ソクラテス的に哲学するための協会 (GSP: Gesellschaft für Sokratisches Philosophieren)」³が毎年数回開催しており、5日間のセッションが本当にあった！ 毎年3月の終わり頃、ヨーロッパが二週間のイースター休暇に入った最初の一週間目に5泊6日かけて行われている。

あの「究極の『相互理解』」を、母語ではない言語で、さまざまなバックグラウンドをもつ国籍の違う人たちと行えば、どんなことになるのだろうか。言語や国籍、宗教などを越えて、本当に「全員が納得のいく真理」を出すことができるのだろうか。そして、お金と時間を費やすほど哲学対話が好きな人びとに会ってみたい。あの「気持ちよさ」を携えた人間関係

を築いてみたい。そんな期待をもって、PPAとGSPが主催する中でも最長のセッション、2018年3月24日(土)～29日(木)に開催されるSDに参加を決めた。おそらく世界で一年に一度、ここだけしか行われていないワークショップだろう。

2. ドイツでSDに参加して

わたしが住む広島市との姉妹都市・ハノーファー市から電車で20分ほどの町、スプリンジ(Springe)にある研修施設のようところで実施された。グループは全部で4つ。

- 常識とは何か？(What is common sense?) [Hannah Altorf]
- 憤慨は、何をもって正当な感情となるか？(Was macht Empörung zu einem berechtigten Gefühl?) [Klaus Blesenkemper]
- 物理的な観察に関するSD

³ 英語によるウェブサイトはwww.socraticdialogue.org/。毎年12月に翌年の日程やテーマが発表されるようだ。組織名の日本語訳は前掲p.133、141より。

(Sokratisches Gespräch
über physikalische Beobachtungen)

※いわゆる「数学SD」だと思われる。今回はロウソクに火を灯した状態を観察し、「炎が燃えているとはどういうことか？」を問うた。

[Dirk Jöst]

- ルールを破ることが正当化される状況／行動とはどんなものか？(Für welche Situationen/Handlungen lässt sich ein Regelbruch rechtfertigen?) [Dieter Krohn]

*[]内は進行役の名前

一番目のグループのみ英語で、わたしが参加したのもこのグループだ。彼らが主催する年間のセッション数回の中でも、英語のグループがあるのは年に1~2回程度のように。英語グループメンバーのカトリンは4回目のSD参加で、毎度ドイツ語のグループを希望

しているが、「英語のグループでも可」とも申告しており、毎回英語グループへの移動を勧められてきた。対話が成立する最低参加者数は5人だそうで、要は英語グループ希望者が毎度それほど多くないのかもしれない。

わたしたちの進行役は、オランダ出身で現在は英国の大学で上級講師を務めるハンナ (Hannah Altorf)。参加者がドイツ出身のカトリン、オランダ出身のトン (たった一人の男性メンバー)、ブルガリアから、自身もSDの進行役を務めるアネータとその教え子のニコレッタがいた。ハンナは対話の間、英語だけでなくドイツ語とオランダ語の単語も、解説のためにしばしば使っていた。(会場全体がドイツ語で話されている時、わたしのためにプライベート通訳者も務めてくれた！)

1日目の土曜日は、参加者約25人の自己紹介を含めたオリエンテーションが行われ、ディナーを食べて終了、パブでも話は続いた。

2 日目は朝 9 時すぎから本格的に SD が始まった。午前中は 20 ~30 分ほどのコーヒータイムを挟んで 9 時から 12 時まで 2 セッション、ランチと長い休憩を挟んだ後、16 時 30 分から 18 時まで 1 セッションが行われる。3 日目午後のセッションはローカルな遠足に行ったため実施しなかったのと、6 日目は午前の 1 セッションのみ実施されたため、合計で 12 セッション・約 18 時間（1 セッションは約 1 時間半）の SD であった。

「What is common sense（以下、CS）？」ハンナはこの問いを選んだ経緯を次のように話していた。「2017 年 10 月にラスベガス銃乱射事件が起こったにもかかわらず、米国人の多くが支持する『常識的な銃規制（common-sense gun control）』とは全く反対のことをトランプ大統領は未だに言っている。この時にいったい CS⁴とは何なのだろうか」と

4 当日語られた「CS」が、日本語

思ったのと、住んでいる国や社会が違う参加者同士で「CS」ということを考えられるだろうか、考えられたらおもしろそうだと思う」。またプログラムにはこうも書いている。「CS は、多様性を賛美する人たちによって遠ざけられたり、広く多様な意見が出るような議論には存在しないかのようにも見える。CS という地は存在するのだろうか？異なる言語を持つ者同士で、“common sense”にあたる同じ言葉がないかもしれない中で、果たして CS について私たちは語る事ができるのだろうか？」と。

対話の手順はこうだった。まず、「CS」に対する第一印象を各人に語ってもらった。「それぞれの言語で「CS」にあたる言葉があるか、それはどんな発音でどんな意味なのか、その言葉で表される典型的な具体例をあげてください、

訳の「常識」という言葉に翻訳可能かどうか定かではないので、このエッセイ内では基本的に、そのまま英語で表記したいと思う。

と。わたしは「ジョウ・シキ、最初の漢字は **always**、**generally** というような意味で、もうひとつの漢字は **recognize**、**knowledge** のような意味だと思う」と話し、「例えば女の子が彼氏の家に行って両親に会う時、『手土産を持っていくのは常識よ』と母親に言われたりする。『もし持っていかなければ、常識がない女の子だと相手の両親に思われてしまうわよ』、そんな会話が想像できる。つまり、日本では時に、「CS」は他の人から自分の印象を損ねないために従うものだと捉えられていると思う」と発言した。

続いて、CS に関する日常的な経験を各々が出した。5つの例の中から1つを選択するにあたり、1人2票で多数決をとってみたい、各人が一番適当だと思う例について理由を述べあったりしたが、なかなか1つに絞ることはできず、最終的には消去法で決まっていた（どのように決めていくかは、進行役が音頭をとった）。「ある集

団が言う『CS』と自分の『CS』が正反対だった例」については、全員が似たような経験を持っているかのごとく吟味の対象として賛成され、ストーリーとしてもおもしろそうだったが、例を出した本人が「実はこれ以上の具体的なストーリーはない」と言い、深く掘ることができなさそうな事例として却下された。また、他の例では、例の要約が話された時点で「それはCSというより直感 (institution) の例なのではないか」という発言が出て、本人も「そうかもしれない」とのことで却下された。わたしが出した「周囲の状況のせいでCSに従うことができなかった例」については「この例で言われている『CS』は、自分の中の『CS』とかけ離れすぎていて考えにくい」と言われる一方で、「自分とまったく違う文化の状況で、よく理解できないCS観だが、だからこそ詳しく聞いて吟味してみたい」との発言もあった。結局、誰もが反対せず、ある程度

論考の扉

投票数もあった理解しやすそうな例「Solve problems with action」が選ばれた。

2日目午後の1セッションでは例の具体的な記述が行われた。選ばれた例では、登場人物は自分・妻・娘で、プライバシーに触れない程度で簡単に要約すると、

娘の引っ越し先の壁紙を妻と塗り替えようと、娘の新居に行ったときのこと。いろいろな悩みや考えが頭をめぐり、道具を手に持ったまま、作業が始められない。しかし、妻の言ったある一言で、わたしの悩みは一気に吹き飛び、私たちはすぐに作業を始められた。後から、わたしはCSという名の一つの教訓を学んだのだと気づいた。あの時、いろいろと思い悩むという行為は必要でなかったし、その状況に置いて効果的ではなかった。妻が行ったことは効果的だった。

というような内容だった。例の記

述が終わったところで、ちょうど2日目も終了。ハンナは宿題として、「なぜ主人公は、これがCSだと考えたと思うか？」という問いを出した。

さらにその後、最後の15分ほどを使ってメタ・ダイアログが行われた。モデレーターとなったアネータ流の方法で、①雰囲気 (atmosphere)、②方法 (method)、③対話 (content) の内容について、それぞれを全員が話した。わたしたちのグループは笑いがよく起こり、初日から最後の日までリラックスした雰囲気で進んだ。

また、ハンナの模造紙の使い方で印象的だったのが、“Parking space”として、その時の対話の流れからは少し外れるが、後でヒントになりそうな言明を書き残しておいたことだった。特に、最後の「一般化 (generalizing)」の過程で、このスペースに一時駐車されていた言明のいくつかがヒントになったり、この中から吟味したりもした。

3日目の最初は、前日のメタ・ダイアログで「例の記述の最後の部分が少し駆け足で、十分に理解できていない」というコメントが数人から出されたため、最後の部分の確認から始まった。その後から4日目までの計5セッションは、砂時計モデル⁵という真ん中の「判断：探求すべき立脚点」に充てられた。まずはひとりひとりが、「この例の中で、主人公がそれを『CS』だと判断した理由」を發表した。模造紙に言明として書かれた後、「この例の中のどの部分からそれが言えるのか」や、「例には書かれていないので深読みしすぎていないか」などの質問が飛び交った。例の記述は終わっていたが、記載されていない部分の状況の確認なども行われた。

この部分が、思想的にも言語的にも一番大変な時間だったと思う。ハンナはわたしの顔色をよく

⁵ ヨース・ケッセルスが考案したモデルで、SDの流れの説明として多くの進行役が採用している。(前掲、p.222)

見てくれていて、ついてきているか、何が話されたかわかるか、何を質問されているか繰り返してみてください、と何度も聞いてくれたのはありがたかった。

なお、3日目の午後は森の中にある霊園に行き、散策を楽しみ、その後、地域で蒸留酒をつくっている蒸留所へ見学・試飲に行った。午前中の対話で大変頭が疲れていたが、そのリフレッシュにもなって楽しい遠足だった。

この2日間の問い——少し別の言い換えをすれば——「この例においてCSはどのようなものと捉えられているだろうか」に対する各々の答えは次のようだった⁶。

- この例はCSを示している。なぜなら彼の妻は、彼の問題に対して既成の(ready-made) 解決策を使ったからだ。
- これはCSの例である。なぜ

⁶ 以降の日本語訳は、意識をせずに行えるだけ忠実に訳した。

なら彼の妻が行ったことは決断 (decision) であり、それがうまく働いているからだ。CS は、それを取り巻く状況や人びとに左右されるものだ。

- この話における CS とは、(心理的に) ひどく傷ついていた彼を助けるための、妻による行動のことである。
- 彼にとって CS とは、彼が信頼している人である妻を信じることである。
- この話の中の CS とは、自分が信頼する人が言ったことを信じることである。またそれは、感情的に安心させてくれるものであり、あれこれ悩んでいたことから解放させてくれるものである。
- CS とは受け入れることである。なぜならそこには議論がないからだ。
- CS は人生／生活 (life) をよりよくするもの、より健やかに (healthier) するもので

ある。CS を使うには、その状況で何が重要なのかを理解する必要がある。

ひとつひとつの言葉の使い方についても細かい確認および議論が行われ——例えば "believe" と "accept" の違い、文中の "it" は何を指しているのかなど——、4 日目の終わり頃には全員がお互いの言明について一応の理解ができた。そしてハンナは次の日の宿題を出した。「みなさんが出した言明は、2 種類の場合 (occasions) ——つまり彼の妻からみた場合の CS と、彼自身からみた場合の CS、両方が含まれています。ですので明日は、それぞれの視点から CS に関する 2 つの言明を考えてきてください」。

また、この日の最後に 2 回目のメタ・ダイアログが行われた。わたしは「自分は考えるのがおそらくゆっくりなほうなので、対話のペースが少し速く、ついていけない時がある」と正直に言えるこ

論者の扉

とができ、共有できたのはなんだか安心した。

5日目の作業は、「一般化 (generalizing)」だった。昨日の言明が、他の例でも一般的に当てはまるような形で、各々が「一般化された『答え』」を発表した。その吟味の過程では、より適切な言葉を選定したり、反例 (counter example) がいくつか出され、修正加筆が行われた。以下は、「CSとは何か」に対する「わたしたちが導き出した『答え』」である。

- CSとは、一般的に効果があるにちがいないものだ。そしてそれは、過去に効果的だったと証明されているものにちがいない。
- CSとは、既成の解決策をすばやく適用することである。その解決策とは、自分が信頼するものであり、かつ／または自分が信頼する人が提供してくれたものである。

- CSとは、それを受け入れるかどうかの議論が必要な時もあるが、それを適用するためには議論を必要としない。
- CSは、ある人の決断 (decisions) が、自分(たち)の幸せ (well-being) を維持したり、ダメージを最小限にするために必要とされる状況に関するものだ。
- ある人が分別ある行動や決断をする時、(同じ文化や社会を共有するような) 近い (relevant) 集団に属する他者は、それが効果的なものだと認識せずにはいられない——だからこそ、私たちはそれをCSと呼んでいる。

上記の「答え」は全員が合意を得たものだ。一方で、「信頼するということ、理由付けをやめるということか?」「感じるということと考えることは別物か?」

「わたしたちは、どのようにしてそれが CS だと即座に認識できるのか?」「CS はどこからやってくる? リソースはどこ?」などの問いも出てきた。最後にハンナは、翌日への課題として「これらの『答え』をひとつの文章にまとめてきてください」と言った。

そしてこの夜は最後の夜ということで、グループごとや希望者が何か出しものをする

「Graduation Evening (Abschlussabend)」が行われた。わたしたちの「Common Sense グループ」は、「ことわざはある意味その社会の常識のようなものである」ということから、各国のことわざをドイツ語に訳して発表し、どの国のことわざなのかを当てるクイズを催した。他のグループは、対話のテーマに沿ったドラマをつくったり、詩の朗読や歌のステージがあった。

最終日は宿題の1センテンスを発表することから始まった。重複しているような表現をどちらか

一方だけにしたり——例えば「すばやく適用すること」と「適用するためには議論を必要としない」——、前日に合意した言明にはない要素を入れている参加者もいて、再度議論になった部分もあった。また、例えば「既成 (ready-made) とはどういうことか?」など、使われている言葉に含まれている意味についての議論も行われた。

しかし、各々が出した1センテンスについては「みなさんほとんど一緒ですね」とうなずきあいながらも、模造紙に書き上げることはなされなかったし、「全員の合意を得た1センテンスをつくる」ということも行われなかった。この点は、私が岡山で経験したSDや、堀江先生の前掲書に書かれている事例のプロセス⁷とは異なった。わたしの中では、この一番最後の「答えの定式化」が「グループで真理に到達した感」があって好きだったのだが。

⁷ 前掲、p.114

その後は少し時間があつたようだったので、“Parking space”にあつたいくつかの論点について話し合った。

最後のセッションが終わる直前には、最後のメタ・ダイアログも行われ、ハンナからも対話全体についてコメントがあつた。その後、全員が集合した部屋で少し事務的な連絡があつた後、ランチを挟んで解散となつた。

3. SD を終えて — 他の SD および広島での哲学カフェとの比較

他のドイツ語グループでは、笑いはあまり起きずに真剣な面持ちで対話が進んだらしい。また、人の話を聞かない態度の参加者がいたグループでは口論のような部分もあつたという。それと比べると、わたしたちのグループはよく笑い合い、ユーモアのある発言も多く、楽しくフレンドリーな雰囲気に対話が進んだ。ある人の発言に集中的に反論が来ている時に、別の人がその人をサポート

するような発言をしたり、全員が第二言語である英語で話していたため、言葉のニュアンスなどが違う場合はいねいに確認が行われたりした。言葉の捉え方の違いで納得できない文章についても、妥協案が出されたりなど、お互いが歩み寄りながら合意を得た対話だった。相手の話をきちんと聞いてくれる姿勢をもった、寛容なメンバーだったと思う。

対話の内容について興味深かつた点は、ほとんどの場合において、CSが個人の視点から語られていたことだ。実はこのSDに参加する前の2月に、わたしが広島で主催する「ひろしま哲学カフェ〜呼吸と哲学のカフェ⁸」にて「常識」というテーマで対話を行った。その時、「常識とは、集団の中でどう振る舞うかの指針のようなものだ」「常識とは、周囲から自分の印象が悪くならないようにするために従うものだ」のような

8

www.facebook.com/philocafehiroshima/

考えが出ており、集団的な視点が入った形で「常識」が考えられることが多かったが、このドイツのSDではあまりそうした傾向がなかった。というのも、もちろん、選ばれた例にそもそもそのような要素が入っていなかったため、この例から出発して一般化された「答え」には入っていないのも無理はない（少々、「近い集団の中で」などの表現は入ったが）。この傾向の違いが、そもそも日本語における「常識」観と英語における「Common Sense」観の違いを表しているように思えた。

また、広島での哲学カフェで出た「常識」にまつわる例——例えば「飲み会の1杯目はビールだ」という常識——を出しても、それはCSだと捉えられなかった。ドイツ人のカトリンによれば、「それは慣習や社会ルールのように見える。なぜなら、ビール業界や力のある人（上司など）が決めたことだから」という理由だった。ただ、ビールの例を出した日本人

参加者は「何が常識なのかは、その場で力を持つ人によって決められている」とも発言しており、この点はカトリンの理由付けとも似ている。広島の哲学カフェにおける「常識」観は、「誰かが決めたこと」と捉える傾向があったように思う一方で、SDのグループメンバーの「CS」観は、「自分の頭で考えたこと」と捉えているように思えた。

他のSD経験と比較すると、「全員の合意を得た1センテンスをつくる」ことをしなかった点以外に、次のような違いも見られた。岡山で松川さんのSDを経験した時や堀江先生の著書などと比べると、みな各ステップで行っていることは本質的には同じだが、そのステップの呼び方が異なるのは面白い。例えば松川さんのSDでは、「①問いをあげる、②問いを選ぶ、③例をあげる、④例を記述する、⑤例からポイントを抽出する、⑥ポイントを吟味する、⑦答えをつくる」という流れだった。また、

特徴的な作業として、⑤の際に、例のどの部分から抽出したのか、ポイントを書く文字色と同じ色で④の模造紙に下線を引く作業をした。また、④の模造紙には、問いを考えるにあたり重要そうなところに下線を引いたり、その時に参加者から出てきたキーワードなどを書き込んでいった。

また、堀江先生が著書で記載している事例⁹は、大学の演習授業の中で週1回のセッションを合計14回行う形で行われた。わたしは実際に参加したわけではないが、この時は「①テーマ（問い）の決定、②例の提示、③例の選択、④例の詳述、⑤答えの探求、⑥答えの定式化（個人）、⑦答えの定式化（グループ）」といった流れで行われたようだ。「最終的に『普通とは●●である』のような形で答えが定式化されればよい」とだけ最初に述べ、そこに至る考え方のプロセスは参加者12人に任せている（何度か、次にすべきこと

を「勧めた」とも書いてあるが)。この点は、ハンナのように明確な宿題指示を出す方法とは異なるように見える。また、ドイツでは、「わたしたちはどのように話し合っていくのがよいか」というようなことは話に上らなかった。メタ・ダイアログでも「方法」について話し合ったが、ハンナの進行についての質問や今後のステップの確認などにとどまった。

最後に、これは日程的な問題であるが、ドイツでは自由な時間が多くあるため、何度か宿題が出て、セッション以外に自分の部屋でひとりで考える時間があつたのもよかった。また、敷地内に全員がとどまり、コーヒータイムやランチ、パブの時間もあつたので、わたしにとっては直前のセッションで聞き取れなかったことを他の参加者に質問できる機会が何度もあつたのが助かった。

4. 参加者へのインタビュー

参加者たちはどのような経緯

⁹ 前掲、p.90-115

でSDを知り、なぜこのセッションに参加しようと思ったのか――、話すことができた何人かに聞いた。わたしのグループのメンバーは、ベルリンに住むカトリンは高校の倫理の先生をしており、政治的な立場はリベラル、「いつか授業でもSDをどうにか採り入れたいと思って学びに来ているが、クラス的人数的に難しそう」。オランダのトンは「リーダーシップを育成するコーチングや、高齢者施設でSDの要素を採り入れている。こんなに長いセッションはできないが、半日くらいで行っている。僕のSDに参加した最高齢は102歳だよ」。ブルガリアのニコレッタは教育方法学を専攻している博士課程の大学院生で、「大学や高校で哲学を教えているので、SDを授業案のひとつとして学びに来た」。数学SDに参加した、スイスからのマデレインは「博物館でワークショップ・デザイナーとして働いており、知人からSDのことを聞いて勉強しに来

た。博物館でもできそうか見極めたい」。原子力発電の広告会社に勤務する、隣町に住むクラウスは「友だちが面白いて言ったから誘われて一緒に来た。ゆっくり考えるっていうのは仕事上の考え方とは違って、楽しいね。来年も行こうと思っているよ」。

参加者約25名の約半分は60代前後という印象だった。SDを現在の形に発展させたグスタフ・ヘックマン¹⁰ (Gustav Heckman, 1898-1996) の教え子だったという人にも何人も会った。また、彼の学生ではないが、彼がハノーファー大学で開いていたSDは一般市民も参加できたため、それに参加していたという人、生涯でSDに参加したのは「数えきれないほど、おそらく50回くらい」という人まで。20代は3人しかいなかった。

進行役にも少しインタビューをしてみた。オランダ出身のハンナが最初にSDに出会ったのはオ

¹⁰ 前掲 p.125

ランダの「International School for Philosophy¹¹」で、所属する英国の大学の授業や、PPA で進行役を務めている。「いつもの“先生”という立場とは違う形で学生と関われる。SD は学生のコミュニティづくりにもよいと思う」。また、ドイツとオランダのSDの違いについても教えてくれ、「オランダのSD はたいてい週末の3日間で、朝から晩まで休憩なしに行うことが多い。この点はドイツのSD とは正反対なので、両者はあまり仲がよくない。一方で、オランダの進行役数人で立ち上げた組織『The New Trivium』¹²のおかげで、オランダではビジネスシーンでの活用など社会的にSD が広まり、SD が一般的なものとなっていると思う。彼らがSD によってお金儲けをしていることに

¹¹ インターナショナルという名前だが、プログラムの説明はオランダ語しかないようだ。

<https://isvw.nl/>

¹² 前掲 p.148、

www.hetnieuwetrivium.nl

についても、ドイツ側は大反対している」と教えてくれた。

1日だけ姿を現したPPAのホルスト¹³ (Horst Gronke) はドイツにて、コーチングでSDを活用したり、企業や学生を相手にSDを行っている。コーチングは個人向けだけでなく、「組織の問題解決・改善を目的としたSDも」。奥さんもSDの進行役で、女性のためのSDを行っているという。「若い参加者がまだまだ少なく、若い進行役が育っていない。若い人への惹きつけが課題」とも話してくれた。

5. ソクラティック・ダイアローグの魅力

「SDは、根本的な問いに対して答えを見つける共同の試みである」¹⁴。これはSDについての公式見解の第一文目である。このこと、ないしこのことを楽しむこ

¹³ 大阪大学大学院でSDを進行したこともある。

¹⁴ 前掲 p.213

とがSDの「純粹な」目的なのかもしれない（「政治的な態度を養う」ことも目的とされていると思うが、これは改めて考えたい）。しかしわたしは、哲学的な愉しさ以外のSDの魅力伝えることが、若い人やより広い層の人にSDを広めていく方法であると思う。わたしが見つけたSDの副産物とは、

（1）普段のコミュニケーションでは味わえない「気持ちよさ（comfortableness）」。

これは「正直な態度で、お互いの考えを理解し、真の納得・合意を得る」ということが達成されたときに感じることができる。それはやはり、SDの手続きとルール¹⁵があるからこそ、SDの魅力に惹かれる参加者が集まるからこそ、可能なことであると思う（もちろん毎回とは限らないが）。

（2）いつもと違う、人との出会い方。クラスが同じ、趣味の場、SNS上、旅先で偶然など、人と人の出会い方はさまざまだ。そこでは、自己紹介から

始まり、似た者同士／共通点から人間関係をつくっていくことが多いように思う。しかし、SDでは相手の素性を知るよりも先に相手の考え方を知るということが起こり、「考え方」にフォーカスした、人との出会いが起こる。さらにSDでの対話は、（参加者がルールに従えば）「正直度の高い会話」になりうる。正直な状態で出会う相手、「考え方」に惹かれた相手。こうした「人との出会い方」ができるのも、SDだからこそなのではないか。

¹⁵ 前掲 p.215-218